慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『唐鍾馗全伝』小考 : 鍾馗故事の変遷を背景として
Sub Title	The story of Tang Zhong Kui : a change legend to novel
Author	植松, 公彦(Uematsu, Kimihiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.25- 43
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『唐鍾馗全伝』小考

――鍾馗故事の変遷を背景として――

植松　公彦

初めに

『唐鍾馗全伝』は魔除けの神として知られる鍾馗を主人公とした中国古典通俗小説における最初の作品である。本稿ではこれを中心に信仰が原初的な故事を生み出しその故事の内容が次第に整理あるいは展開されて行く過程を背景として、それらが古典通俗小説という文学形式とどのように関連しているのかという問題について考えてみようと思う。

一、『唐鍾馗全伝』の刊行および成立時期

鍾馗を主人公とする古典通俗小説には明代の『唐鍾馗全伝』、清代の『斬鬼伝』、『唐鍾馗平鬼伝』[1]の三書がある。これらは孫楷第氏の『中国通俗小説書目』[2]では巻七明清小説部乙の「諷喩第四」に、大塚秀高氏の『増補中国通俗小説書目』[3]では巻二小説長篇部の「霊怪・神仙・妖術」に分類されている。

『唐鍾馗全伝』の内容には確かに諷喩と見なし得る要素も含まれてはいるが、内容全体から見れば前者の判断には少なからず無理があるように思う。[4] 鍾馗故事を主題とするという観点からこれを分類する後者の判断はより実情に即していよう。[5]

また前者における上記三書の書誌事項を比較すると『唐鍾馗全伝』についてのみ版式に関する記述が全く見られない。そこに挙げる日本内閣文庫蔵の明刊本は部分的に欠落があるとはいえ決して版式を判別することが不可能なものではないことから、孫氏は『唐鍾馗全伝』を実際に手にすることがなかったと思われる。

『唐鍾馗全伝』の現存する刊本はこれまで日本内閣文庫蔵のもののみとされていた。これは封面と巻三第三葉および巻四第一九葉以下が欠落している。『古本小説集成』（上海古籍出版社）、『古本小説叢刊』（中華書局）、『明清善本小説叢刊初編』（天一出版社）に『唐鍾馗全伝』の影印が収録されているが、これらは全て日本内閣文庫本によるものである。

その後磯部彰氏によって静岡県立中央図書館葵文庫内の久能文庫に日本内閣文庫本と同版の刊本が所蔵されていることが確認され、その影印が刊行された。[6] 静岡県立中央図書館本には封面が残っており、また巻一第二〇葉b面の巻尾題および巻二第一〇葉b面の後半二分の一が欠落してはいるものの日本内閣文庫本と対照することによってその箇所を補うことができる。従って上記二つの同版刊本を用いればほぼ完全に『唐鍾馗全伝』の内容を把握することが可能となったのである。

以上の状況を踏まえたうえで『唐鍾馗全伝』の書誌事項を簡潔にまとめ次にそこから派生する問題について述べてみようと思う。

四巻三三則。序跋、序目なし。封面題「全像唐鍾馗出身祛妖伝」および刊記「安正堂板」、「書林劉双松梓行」（静岡県立中央図書館本のみ）。巻一巻首題「鼎鍥全像按鑑唐鍾馗全伝」および刊記「書林安正堂補正」、「後街劉双松梓行」。一巻尾題「鼎鍥全像按鑑唐鍾馗斬妖伝」。巻二巻首、巻三巻首、巻四巻首および巻尾題「鼎鍥全像按鑑唐鍾馗降妖伝」。二巻尾題「鼎鍥唐鍾馗斬妖伝」。巻三巻尾題「鍾馗伝」。上図下文、図の左右に四字の題辞、半葉一〇行、行一七字。序次なし、本文中の四～八字からなる則目の上方に黒点を配す。各則末には「且聴下回分解」あるいは「又聴下回分解」の句および七言四句の詩。

孫、大塚両氏とも『唐鍾馗全伝』を四巻三三則としているが、これは本文中に見られる則目を合計したものである。ただし第一則「鍾恵夫婦花園遊玩」（便宜上則目に番号を付す、以下同じ）の途中[7]に「又聴下回分解」の句があり、続いて「施捨沙門費万銭、広提衆信結良縁、蒙天已賜麒麟子、皆為前生佈（ママ）福田」と七言四句の詩が置かれている点には注意を要する。

この詩の直後に本文の「却説[8]潭氏幸産一嬰児」の句が続いているがこの直前には則目が見られない。そのためか孫、大塚両氏ともこの箇所を則目として数えていない。この箇所の前後の内容を見ると前半部は鍾恵の妻潭氏が男児を出産するというもの、後半部は二人の神僧が現れてその男児の将来を予言するというものであり内容の明らかな相違から後半部を独立した一則と見なすこともできる。

則目が見られないという事実を重視するのであれば孫、大塚両氏の記述が誤りであるとは言い切れない。しかし何らかの事情によって則目が欠落したとも考えられるため、上記の箇所を第二則「（則目なし）」と見なし、全体としては四巻三四則に改めるべきであると思う[9]。

また第八則と第一〇則には「帝試鍾馗」という同一の則目が見られる。第八則には則目通り玉帝が鍾馗の人物を試すという内容が見られるが、第一〇則の内容は父鍾恵五十歳の誕生日の祝宴で鍾馗が詞を詠むというものであり則目との関連は全く見られない。これは上述した則目の欠落と混乱および書誌事項に挙げた封面と各巻首巻尾題に見られる書名の不整合は、現存する『唐鍾馗全伝』が原刊本ではないことを示唆している。

胡万川氏は『唐鍾馗全伝』の刊行時期について、先ず W. L. Idema、Glen Dudbridge 両氏による万暦年間に建陽一帯で刊行された他の古典通俗小説と『唐鍾馗全伝』の版式の類似を指摘する説を引いている。そのうえで刊記に「補正」の語が見られることから、この版本は原刊本ではなくかつ万暦年間に建陽一帯で刊行されたものであると述べている。(10)

『明代版刻綜録』によれば安正堂は劉宗器が開いた建陽の書林である。その刊行書数は多く最も早い時期のもので弘治一六（一五〇三）年、最も遅い時期のもので万暦三九（一六一一）年であるという。(11) しかし同書に列挙されている安正堂の刊行書には『唐鍾馗全伝』と思われる書名は全く見られない。

ただし例えば『丹溪先生金匱良方』三巻に「明弘治十六（一五〇三）年建陽書林劉宗器安正堂刊」（傍点は筆者による、以下同じ）、『集注分類東坡先生詩』二〇巻に「明正徳十一（一五一六）年建陽書林劉宗器安正堂刊」、『詩経疏義会通』二〇巻に「明嘉靖二（一五二三）年建陽書林劉宗器安正堂刊」などとあるように弘治、正徳、嘉靖年間の刊行書には劉宗器の名が見られる。

一方で『新編古今事文類聚前集』六〇巻に「明万暦三十五（一六〇七）年建陽書林劉双松安正堂刊」などとあるよう

に、万暦年間の刊行書には劉双松[12]の名が見られる。これらの記述は先に引いた胡氏の説を裏付けるものであり、それらを総合して考えるならば現存する『唐鍾馗全伝』の刊行時期は万暦年間と推定することができる。

また胡氏は『唐鍾馗全伝』の成立時期と作者について、古典通俗小説における分章分回は嘉靖年間以降に始まり白話を主体とする傾向は万暦年間以降に見られるという鄭西諦氏の考証を引きつつも、先の Glen Dudbridge 氏の説を援用して文体は「浅俗的文言」ではあるがその成立時期はやはり万暦年間であり、作者は万暦年間の建陽一帯の人であると述べている[13]。

しかし則目の欠落と混乱および封面と巻首巻尾の書名の不整合は「補正」の語とともに現存する『唐鍾馗全伝』が原刊本でないことを示唆しており、またその刊記には作者の名が含まれておらず参考となり得る序跋も見られない。

この点から考えるならば万暦年間に建陽一帯で刊行された古典通俗小説と版式、形式および文体が類似しているという理由のみで、その成立時期を万暦年間と特定することは難しいと思われる。ましてや作者までも万暦年間の建陽一帯の人とするのはいささか早まった見解であろう。

よってここでは『唐鍾馗全伝』の成立時期は万暦年間あるいはそれ以前に溯る可能性があることを指摘しておくに止めたい。

二、唐代から元代までの鍾馗信仰の変遷

鍾馗が信仰の対象となっていたことが文献上に見られるのは唐代以降のことである[14]。鍾馗信仰の起源については宋代以降歴代の硯学によって数多くの考証がなされており、それらの説は「終葵」あるいは「鍾葵」が音通によって鍾馗に

転訛したという説[15]、「終夔」が音通によって鍾馗に転訛したという説[16]、古代の大儺の主役である「方相氏」を起源とする説[17]の三種に大別することができる。

では鍾馗はどのような形で信仰を受けていたのだろうか。唐玄宗の時代には宮中で鍾馗の神像が描かれてそれを暦と合わせて臣下に下賜したという[18]。また唐末には鍾馗の神像を門に掛ける習慣があったという[19]。これらにはすでに後世の玄宗を巡る鍾馗故事の萌芽が見られる。

北宋の都汴京では年末が近くなると街中で門神、桃板、桃符、財門鈍驢などに混じって鍾馗が売られていたという[20]。鍾馗は民間においても門神などとともに年画に描かれるようになり年末の魔除けの神として信仰を受けていたのである[21]。また宮中において大晦日に行われる大儺の儀式では鍾馗の扮装をした者がその一翼を担っていたという[22]。

南宋の都臨安では鍾馗は民間で行われる大儺にもその姿を現していた[23]。また十二月末になると庶民の家ではその大小を問わず門前に水を撒き地面を掃いて穢れを清め、門神を貼り替えたり鍾馗の絵を掛けたりなどしたという[24]。宋代の幾つかの文献には以上のような内容の記述が見られるのであって[25]、鍾馗信仰が宮中民間を問わず広範に流行していたことが分かる。

また後述するように鍾馗が唐玄宗の夢に現れて悪鬼を食らうという内容の故事が『夢溪筆談・補筆談』などの宋代の文献に記述されている。宋代の鍾馗信仰の流行が人々の想像力を刺激して次第に鍾馗故事が形成されて行ったものと思われる。

筆者の管見によれば元代には唐宋代のように鍾馗信仰の具体的な状況を記述した文献は少ない。しかしむしろ元代は鍾馗故事により豊かな想像が加えられた時期であったとも言える。元代の画工にも鍾馗は画題としてしばしば取り上げ

られていた。例を挙げるならば鍾馗を描いた元代の画家には陳琳、王蒙がいるという。[26] また王振鵬に「鍾馗嫁妹」[27]を画題とした作品があり顔輝には「鍾馗元夜出遊図」巻があるという。[28]

当時人々が脳裏に描いていた鍾馗の形象の一端を表している文学作品に薩都剌「終南進士行和李五峰題馬麟画鍾馗図」詩がある。その鍾馗に対する描写は非常に具体的であり従来の鍾馗に関する記述には決して見られなかったものである。

「お天道様に光はなく雷が突然ガラガラと轟く、天宮からはゼイゼイと息を切らして陰鬼を追う声が聞こえる、陰鬼は裸足で空を走り竜の尾をうっかり踏み付けて、盗み出した紅の蓮の花をハラハラと秋雨に散らす、終南進士の鍾馗の髪は怒りで逆立って冠を刺し貫き、身には緑の上着を纏って帯を締め黒い靴をゆったりと履いている、口から赤い血をボトボトと滴らせて陰鬼の肝を食らい、破鐘のような声は秋風にグワングワンと響いて凄まじい、大きな鬼は恐ろしさで跳び上がり小さな鬼は泣き叫ぶ、安禄山の化した豬龍が飢えて黄金の殿屋を嚙み砕いた時のよう、今でもなお鍾馗の怒りは収まることなく、戟のように鋭い髭はギザギザで両の眼は吊り上がっている[29]」

宮中や民間で行われていた大儺の儀式における鍾馗の扮装や年画に見られる鍾馗像が画工の創作意欲をかき立て、さらに彼らが描く鍾馗像が文人の想像力を飛躍させたことは想像に難くない。この詩では鍾馗が悪鬼を捕らえて食らうという以外に唐玄宗を巡る故事に関わる内容は全く見られないが、単純素朴な信仰から故事としての体裁を持つに至る過程を示してくれる文学作品として注目に値しよう。

三、宋代から明代までの鍾馗故事の変遷

宋代の沈括『夢溪筆談・補筆談』には以下の内容が見られる。

「禁中に呉道子が描いた鍾馗の神像があり巻首の唐人の題記にはこう記されていた、『明皇は開元年間に驪山で武事を講じられた、その年明皇は宮廷にお帰りになるとご気分が優れなくなり瘧を患われた、翌月になろうとする頃になっても巫女も医者も病を快方に向かわせることができなかった、ある晩ふと天子は夢に二人の鬼をご覧になったが一人は大きく一人は小さかった、小さな鬼は深紅の衣に褌姿、一方の足には靴を履きもう一方の足は裸足でその靴をぶら下げて一本の大きな竹骨の扇子を差し挟み、楊貴妃の紫香嚢と天子の玉笛を盗んで殿内を駆け回っていた。大きな鬼は帽子を頂き、藍色の衣を着て一方の肩を肌脱ぎ革靴を両足に履いて、小さな鬼を捕らえるとその目を抉り体を引き裂いて食ってしまった。天子は大きな鬼に『おまえは何者だ』とお尋ねになった、すると大きな鬼は『私の名は鍾馗氏、武挙に落第した進士でございます、陛下のために天下の妖魔を除くことをお誓い申し上げます』と答えた、夢が覚めると瘧はたちどころに癒えてお体は益々お元気になられた、そこで画工の呉道子を召されて夢の中の出来事をお告げになり『朕のために夢の有様をそっくりに描いてくれ』とおっしゃった、呉道子は詔を奉じたとたん頭がぼんやりとしてまるで眼前にその夢を見るかのようであり、筆を執って描き終わると天子に奉った、天子は暫くの間目を見張ってこれをご覧になると机を撫でながら『おお、あなたは朕と同じ夢を見たのか、夢と瓜二つではないか』とおっしゃった、呉道子は進み出て『陛下が苦労して政務に当たられ、その大才のあまりに食事が疎かになっていらっしゃったので瘧が陛下のお体を犯したのです、すると果たして邪を除き去るものが現れて陛下の御徳を守ったのでございます』と申し上げ、舞蹈の礼

をして天子の永遠の御齢をお祝い申し上げた、天子は大いに喜ばれ呉道子を労って金百両を下賜し『霊祇夢に応ずるに、厥の疾全く瘳えり、烈士の妖を除けるは、実に須らく称奬すべし、因りて異状を図き、有司に頒けて顕わす、歳暮に駆除して、宜しく遍く識らしめるべし、以て邪魅を祛い、兼ねて妖氛を静め、仍も天下に告げて、悉く知委せしめん』と評語をお付けになった」[30]。

これは後世の鍾馗故事の基礎となる内容を持つ最も早い例である。唐玄宗の治世以前からすでに鍾馗信仰は存在していた。特に宋代以降その広範な流行を背景として、鍾馗の神像が唐玄宗から臣下に下賜されたという史実に鬼神を善く描きかつ唐玄宗に寵愛されたという画工呉道子[31]を結び付けるなどして、鍾馗故事としての内容が整理あるいは展開され始めていたのである。

宋代の高承『事物紀原』と明代の陳耀文『天中記』所引の『唐逸史』に見られる鍾馗故事[32]は『夢溪筆談・補筆談』のものと基本的には同内容である。これら三書に見られる鍾馗故事の内容において注意を要する相違点を挙げるならば以下の二点にまとめることができる。

第一点は鍾馗の出自に関する記述である。『夢溪筆談・補筆談』には鍾馗は武挙に落第した進士であるとのみ述べられている。『事物紀原』には鍾馗の出身は終南山であり、唐玄宗を救った理由については科挙に落第したので宮中の階に頭を打ち付けて自害したが唐玄宗が詔を発し緑袍を下賜して弔ってくれたためであると述べられている。『唐逸史』には鍾馗は唐高祖の武徳年間に科挙に落第した進士であり科挙に落第して自害したのは故郷に帰るのを恥じたためであると述べられている。

第二点は鍾馗が食らった悪鬼についての記述である。『夢溪筆談・補筆談』では小さな鬼とされているだけだが『事

物紀原』では鬼は虚耗と名付けられている。さらに『唐逸史』には虚は虚空を見渡して人の物を盗むということ、耗は人の慶事を憂に変えてしまうことであるというようにその名の由来が述べられている。

さて沈括は北宋の嘉祐八（一〇六三）年に進士、熙寧（一〇六八～一〇七七）年間に翰林学士、竜図閣待制になった人[33]、高承は北宋の元豊（一〇七八～一〇八五）年間の人[34]であるため『夢溪筆談・補筆談』の成立時期は『事物紀原』に先んずるものと思われる。一方『唐逸史』は佚書でありその作者と成立時期は不明であるが、その書名から推測するならば宋代以降に唐代の逸聞や俗説を収集して編纂されたものと考えられる。

以上のことを踏まえたうえで上記三種の文献に見られる鍾馗の出自に関する記述を比較するならば『唐逸史』に「武徳中応挙して捷ばざる」とあるのは『夢溪筆談・補筆談』の「武挙捷ばざる」と『事物紀原』の「応挙して捷ばざる」という記述の相違を整理しようと試みた、あるいは混同してしまった結果ではなかろうか。

鍾馗が悪鬼を食らって唐玄宗を救った理由については『夢溪筆談・補筆談』、『事物紀原』、『唐逸史』の順にその記述はより具体的なものになっている。また悪鬼についても同様の順でその記述はより詳細なものになっている。

これらのことを総合して考えるならば鍾馗故事は『夢溪筆談・補筆談』、『事物紀原』、『唐逸史』の順にその内容が整理あるいは展開されて行ったと見なすことができよう。

『唐逸史』では鍾馗を武徳年間の人としたために鍾馗と唐玄宗の関係は『夢溪筆談・補筆談』と『事物紀原』の記述よりもかえって曖昧なものになってしまった。しかしこれも字句の異同を整理することにのみ注意を奪われた結果であったと考えれば、上記三書に記述されている鍾馗故事の時間的な前後関係を逆転させるほどの問題ではないと思われる。

元刻本とされる『新編連相搜神広記』、明刊本とされる『三教源流聖帝仏祖搜神大全』にも若干の字句の異同はあるものの『唐逸史』とほぼ同文の鍾馗故事が見られ[35]、明刊本とされる『新刻出像増補搜神記大全』には『唐逸史』以下の記述を簡略にしたと思われるものが見られる[36]。後世の鍾馗故事は宋代に端を発しその内容が徐々に整理あるいは展開されながら、元代を経て明代に至る頃には一篇の故事として定着していたと考えられる。

さて明代には題目を「賀新正喜賞三陽宴」、正名を「慶豊年五鬼鬧鍾馗」とする従来の鍾馗故事に大幅な脚色を加えた雑劇がある[37]。その巻尾には「乙卯七月廿七日校内本清常道人」という署名が見られる。清常道人とは万暦年間の人、趙琦美の号であることから趙琦美が万暦四三（一六一五）年に内府本を校合したものであることが分かる。この署名によればその成立時期は万暦年間あるいはそれを溯ると考えられるが、雑劇の流行が明代になるとともに衰退することを考えると『唐鍾馗全伝』の成立に先んずる可能性が強い。

「慶豊年五鬼鬧鍾馗」は基本的に鍾馗故事の内容を踏まえてはいるものの、登場人物には鍾馗の応挙を阻む敵役として唐の権臣楊国忠を配し唐玄宗を殿頭官に置き換えるなど雑劇という比較的自由な表現が可能な文学形式を通じて、鍾馗の活躍振りが生き生きと描かれている。

従来の文献に見られる単純素朴な故事が雑劇という娯楽性の高い表現手段を経ることによってさらに起伏に富んだ内容を持つに至るという意味で、また『唐鍾馗全伝』と同時期あるいはそれに先んずる文学作品という意味でも「慶豊年五鬼鬧鍾馗」の存在は重要である。

四、鍾馗故事と『唐鍾馗全伝』

明末に至って古典通俗小説が盛んに刊行されるようになり以上述べてきたような鍾馗信仰および鍾馗故事を背景として『唐鍾馗全伝』は成立する。[38] 以下に『唐鍾馗全伝』の全則目を挙げる。則目番号は〈　〉内に示す。

第一巻〈一〉鍾恵夫婦花園遊玩、〈二〉（回目無し）[37]、〈三〉鍾恵夫婦与児取名、〈四〉鍾恵夫婦議児就学、〈五〉鍾恵入館従師、〈六〉遊玩竜舟、〈七〉習学挙業、〈八〉帝試鍾馗、〈九〉求医療病、〈一〇〉帝試鍾馗

第二巻〈一一〉帝賜筆剣、〈一二〉送礼求婚、〈一三〉雷撃雉精、〈一四〉立斬石馬、〈一五〉収除鼈精、〈一六〉赴試不捷

第三巻〈一七〉超度秀英、〈一八〉刀山地獄、〈一九〉寒氷地獄、〈二〇〉鋸解地獄、〈二一〉磨々地獄、〈二二〉沸油地獄、〈二三〉磑搗地獄、〈二四〉割舌地獄、〈二五〉称秤地獄

第四巻〈二六〉木驢地獄、〈二七〉転輪十殿、〈二八〉回転天宮、〈二九〉誅戮山魈、〈三〇〉捉獲小鬼、〈三一〉収捉蝙蝠、〈三二〉証除元弼、〈三三〉対証盆冤、〈三四〉簡撃五通

『唐鍾馗全伝』は内容によって〈一〉～〈一〇〉鍾馗出生、〈一一〉～〈一六〉応挙落第、〈一七〉～〈二八〉地獄巡り、〈二九〉～〈三四〉妖魔退治の四段に分けることができる。以下に各段ごとの梗概を述べる。

鍾馗出生。海州に隠棲する元唐朝の大臣鍾恵の妻潭氏が神託を受けて一人の男児を出産し鍾馗と命名する。鍾馗は父母の訓戒を守って刻苦勉励し人々はその神童ぶりを称讃する。玉帝は鍾馗の人物を試して善士であると称え、鍾馗に後日この世の善悪を掌り天下の妖魔を治めさせかつ金榜にその名を登らせることを決める。

応挙落第。玉帝が鍾馗に人間の善悪を記す筆と天下の妖魔を払う剣を授ける。鍾馗は張憲夫妻の娘秀英を娶る。雉精、石馬、鼈精を退治しつつ応挙のため都に赴くが落第して失意のまま終南山へ向かう。その途中親不孝の李克義夫婦を天に訴えて雷死させる。鍾馗は終南山で勉学に励み再度応挙して殿試にまで至るが、その容貌の醜さを唐玄宗に嫌われて落第し憤慨して自害する。その魂は天宮に昇り玉帝によって冥司の監察官に任命され冥府の査察に向かう。

地獄巡り。刀山地獄、寒氷地獄、鋸解地獄、磨々地獄、沸油地獄、磑搗地獄、割舌地獄、称秤地獄、木驢地獄、転輪殿を査察する。(40)

妖魔退治。鍾馗は天宮に戻り査察報告書を作成して玉帝に復命する。玉帝は鍾馗に降妖鉄簡を賜い掌理陰陽降妖都元帥に封ずる。(41) 鍾馗は下界に降りると山魈、唐玄宗の夢に現れた虚耗、蝙蝠の妖怪を退治し、証人として包公の裁判を助けた後、(42) 五通神を追い払う。

『唐鍾馗全伝』は従来の鍾馗故事が脚色されたというよりはほとんど新たに創作されたと言ってよいが、肝心な従来の唐玄宗を巡る故事の内容は第三〇則「捉獲小鬼」に見られる。この前半部は多少の字句の異同があるものの『唐逸史』以下の文献の記述をほぼそのまま踏襲している。

後半部には夢から覚めた唐玄宗が翌日群臣に夢の中の出来事を語る場面が設けられているが、基本的には前半部の内容がほぼそのまま繰り返されている。そして最後に呉道子を召して鍾馗の神像を描かせるという内容が従来の鍾馗故事の記述よりもやや詳しく述べられている。この後半部は前半部が『唐逸史』以下の文献に見られる記述をほぼそのまま踏襲したために生じた簡略に過ぎる点を補おうとする意図によって設けられたのであろう。

その前半部の内容で特に注目すべき点は「主席で状元に合格いたしましたが、唐王が私の容貌が醜いのをお嫌いにな

り資格を奪って用いてくださらなかったために、故郷に帰るのを恥じて殿中の階に頭を打ちつけて自害いたしました[43]」と鍾馗が述べていることである。ここでは唐玄宗が鍾馗の容貌が醜いのを嫌って鍾馗から状元の資格を奪ったという内容が新たに設けられている。

この箇所についてはその枕となる内容が第一七則「超度秀英」に見られる。鍾馗は一度目の科挙に失敗した後に再び応挙し状元として殿試に望むが「唐王はその容貌が醜いのを嫌いついに彼を退けて用いなかった。鍾馗は進み出て『当今は文才によって士を招くと私は聞いておりましたが、容貌によって人を退けるとは聞いたことがございません』と弁じた、鍾馗は唐王にこう言うと階に頭を打ちつけて自害した、後に唐王は後悔して鍾馗に緑袍を下賜し厚礼をもって彼を弔った[44]」とある。

つまり『唐逸史』以下の文献の記述を踏襲しているに過ぎない第三〇則「捉獲小鬼」に第一七則「超度秀英」における上記の場面を枕として設けることによって、従来の鍾馗故事に見られる鍾馗が唐玄宗を助けるまでの顚末がある程度整えられた形で取り入れられているのである。

鍾馗の容貌が醜いという描写は従来の鍾馗故事および「慶豊年五鬼鬧鍾馗」雑劇には見られない。鍾馗と唐玄宗を巡る故事において鍾馗が容貌の醜さのゆえに科挙に落第するという内容が現在に至るまで最も一般的な形で流布している[45]ことを考えると、『唐鍾馗全伝』に見られる一連の内容は鍾馗故事の形成過程で一つ注目すべき点であると言えよう。

第一七則「超度秀英」の鍾馗が科挙に落第して自殺する場面と第三〇則「捉獲小鬼」の鍾馗が唐玄宗の夢に現れて悪鬼を食らう場面の間には、鍾馗が玉帝の命によって冥府を査察しそれを経て神格に列せられるという内容が設けられており[46]、従来の鍾馗故事を大幅に引き延ばした形となっている。地獄巡りの一段を設けたことには様々な理由が考えられ

るが、鍾馗故事の変遷という観点から見ればこれはやはり従来の内容をさらに展開しようとした結果であろう。

また例えば第一一則「帝賜筆剣」には玉帝の使者が鍾馗の夢に現れて「玉帝は汝に宝剣一振と神筆一本を下賜された、この筆は上は天宮に達し下は地府に通ずることができる、もしこの世に善悪の行いがあればこの筆でそれを記すことができるのだ、剣は天下の邪魅を除き天下の虚耗を治めることができる、もしこの世に妖魔がいればこの剣でそれを降すことができるのだ[47]」と述べる場面がある。

玉帝の神託という因果応報的な構成を取ることによって鍾馗の神格に権威を付与すると同時に、後の展開に合理性を持たせようという意識は古典通俗小説にも広く見られるところであって『唐鍾馗全伝』にもやはり従来の鍾馗故事の極めて簡潔な内容を整理あるいは展開しようという意識が見られる。

以上のような観点から『唐鍾馗全伝』を見るならば、その大半を新たに創作したと思われるこの作品もやはり鍾馗故事の変遷の中に位置付けることができるわけであり、宋代以降の鍾馗故事に関する記述と同様にその基本的な内容を保ちながらもそれをさらに整理あるいは展開しようとする方向性を見て取ることができるのである。

まとめ

鍾馗について言えばその魔除けの神としての信仰が普遍的であるためか、かえってその掣肘を強く受けて故事として多様な展開を見せることはなかったと思われる。内容の大部分を新たに付け加えたとはいえ『唐鍾馗全伝』も決してその例外とは言えない。

しかし鍾馗故事の変遷の中に『唐鍾馗全伝』を位置付けるならば、この作品が鍾馗故事の内容の成立に与えた影響は

決して小さくはない。信仰から生み出された故事が古典通俗小説に題材を提供しつつもその展開に制限を加え、また逆にその作品が題材の性格を限定して行くという問題を考えるうえでも『唐鍾馗全伝』は好例を示してくれていると思う。

本稿では『唐鍾馗全伝』と清代の『斬鬼伝』、『唐鍾馗平鬼伝』との関連に言及することができなかった。この点については今後の課題としたい。

注

(1) 清、劉璋『斬鬼伝』四巻一〇回。清、東山雲中道人『唐鍾馗平鬼伝』八巻一六回。

(2) 孫楷第『中国通俗小説書目』(作家出版社、一九五七年)。

(3) 大塚秀高『増補中国通俗小説書目』(汲古書院、一九八七年)。

(4) 胡万川『鍾馗神話与小説之研究』(文史哲学集成、文史哲出版社、一九七九年)には孫氏が『唐鍾馗全伝』、『斬鬼伝』、『唐鍾馗平鬼伝』を「諷喩第四」に分類していることについて「這是由於未曾獲読『鍾馗全伝』所引起的誤解。若照他編目分類的標準而言、『鍾馗全伝』応当帰於霊怪類」と述べられている。一二八～一二九頁。

(5) 大塚氏は『唐鍾馗全伝』、『斬鬼伝』、『唐鍾馗平鬼伝』が鍾馗を主題としていることに着目して「霊怪・神仙・妖術」に分類したと述べている。注(3)前掲書、一七頁。

(6) 磯部彰編、静岡県立中央図書館蔵『鼎鍥全像按鑑唐鍾馗斬妖伝』(明清出版機構研究会、一九九一年)。久能文庫については同書解題を参照。

(7) 『唐鍾馗全伝』巻一第四葉a面二行目。

(8) 「鍾恵夫婦与児取名」、「遊玩龍舟」、「習学挙業」、「捉獲小鬼」以外の各則は全て冒頭に「却説」の語を置く。則目番号については本稿第四節を参照。

(9) 江蘇省社会科学院明清小説研究中心文学研究所編『中国通俗小説総目提要』(中国文聯出版公司、一九九〇年)は『唐鍾馗全伝』を四巻三五回とする。ここでは本稿で指摘する第二則「(則目なし)」と日本内閣文庫本の巻三第三葉の欠落を回目数に入れているが、静岡県立中央図書館本によれば後者を則目数に入れるのは誤りである。なお古本小説集成所収の『唐鍾馗全伝』影印本の前言では于世明氏が三八回としているがこれは明らかに誤りである。

(10) 注(4)前掲書、一二九～一三〇頁。

(11) 杜信孚『明代版刻綜録』(江蘇広陵古籍刻印社、一九八三年)巻二、二八「安正堂」条。

(12) 磯部氏は「劉宗器と劉双松は父子か、祖父・孫の関係であろう」と述べている。注(6)前掲書、解題、七頁。

(13) 注(4)前掲書、一三〇～一三一頁。

(14) 敦煌出土の唐写本『切韻』残巻「馗」字の注に「鍾馗、神名なり」とあるのが最初のものとされている。

(15) 古代天子の持つ大圭の頭部は「終葵」あるいは「鍾葵」の、つまり椎の形をしており悪鬼を払う霊力を持っていた、あるいは大儺の儀式において悪鬼を払うために「終葵」あるいは「鍾葵」が、つまり椎が用いられたという。明楊慎『丹鉛総録』巻一三「鍾葵鍾馗終葵」条、清顧炎武『日知録』巻一〇「終葵」条など数多くの論考が見られる。日本では永尾竜造氏が著書『支那民俗誌』(支那民俗誌刊行会、一九四一年)の中で大圭が人形に見立てられて鍾馗になったという説を立てている。同書第一巻、三〇五～三二一頁。

(16) 明、胡王麟『少室山房筆叢』巻二二「鍾馗」条では陳心叔の説を引いて「終」字には「死滅させる」、「夔」字には「妖魔」の意味があると述べられている。

(17) 胡氏、注(4)前掲書、六一頁～一二六頁。また蔣嘯琴『大儺考—起源及其舞踏演変之研究—』(蘭亭書店、一九八七年)は鍾馗と方相氏の関連に言及している。同書、六八～八九頁。

(18) 唐、張説「謝賜鍾馗及歴日表」(『欽定全唐文』巻二二三)。また唐、劉禹錫「為李中丞謝賜鍾馗歴日表」、「為淮南杜相公謝賜鍾馗歴日表」(『欽定全唐文』巻六〇二)にも同様の記述が見られる。

(19) 唐、范攄『雲溪友議』巻七。

(20) 宋、孟元老『東京夢華録』巻一〇「十二月」条。

(21) 宋『広韻』巻一、脂第六「馗」字の注に「鍾馗の俗以て悪を辟く」とある。注(14)前掲書の記述に比べて鍾馗信仰に対

する記述はやや具体的なものとなっている。

(22) 注(20)前掲書、巻一〇「除夕」条。

(23) 宋、呉自牧『夢粱録』巻六「十二月」条。

(24) 注(23)前掲書、巻六「除夜」条。

(25) 宋、周密『武林旧事』巻三「歳除」条にも同様の記述が見られる。

(26) 馬書田『華夏諸神』(北京燕山出版社、一九九〇年)二七五頁。

(27) 袁珂編『中国神話大詞典』(四川辞書出版社、一九九八年)「鍾馗嫁妹」項によれば、清、張大復「天下楽」伝奇に「鍾馗嫁妹」という一幕があり、昆劇、京劇、川劇、滇劇などにもこの劇目が見られるという。

(28) 蔣氏、注(17)前掲書、八一頁。

(29) 元、薩都剌「終南進士行和李五峰題馬麟画鍾馗図」(『元詩選』戊集所収)。

(30) 宋、沈括『夢溪筆談・補筆談』巻三。

(31) 宋『宣和画譜』巻二「道釈」二に呉道子の伝がある。また宋、景煥『野人閒話』(『太平広記』巻二一四、「雑編」所引)によれば呉道子が鍾馗の神像を描いたという故事が五代の頃にはすでに流布していたと思われる。

(32) 宋、高承『事物紀原』巻八。『唐逸史』(明陳耀文『天中記』巻四、「夢鍾馗」条所引)。

(33) 『四庫全書総目』巻一二〇、子部三〇、雑家類四「夢溪筆談二十六巻補筆談二巻続補筆談一巻」条。

(34) 『四庫全書総目』巻一三五、子部四五、類書類一「事物紀原十巻」条。

(35) 元、秦子晋『新編連相搜神広記』後集「鍾馗」条。明『三教源流聖帝仏祖搜神大全』巻三「鍾馗」条。

(36) 明『新刻出像搜神記大全』巻六「鍾馗」条。

(37) 王季烈校『孤本元明雑劇』(台湾商務印書館、一九七六年)巻一〇所収。同書の提要には「明人撰、姓名未詳」とある。その形式から見て雑劇であることは間違いないが成立時期については疑問が残る。

(38) 『唐鍾馗全伝』の成立時期および刊行時期については本稿第一節を参照。

(39) 本稿第一節を参照。

(40) 桜井幸江氏は「『唐鍾馗全伝』について—包公説話との関連を中心に—」(『お茶の水女子大学中国文学学会報』第五号、

一九八六年）で「十王経」「玉暦鈔伝」や「七七宝巻」「十殿宝巻」の影響を示唆している。

(41) 注(37)前掲書、巻一〇所収の「慶豊年五鬼鬧鍾馗」雑劇では鍾馗は死後玉帝によって「天下管領邪魔鬼怪」に封ぜられる。

(42) 胡氏は注(4)前掲書、一三一～一三二頁で特に包公説話に見られる「烏盆子」と『唐鍾馗全伝』第三三則「対証盆冤」との関連に言及しており、桜井氏は注(40)前掲論文でその問題についてさらに詳細な考察を加えている。

(43) 『唐鍾馗全伝』第三〇則「捉獲小鬼」、「臣乃終南山進士也、因中頭名状元、唐王嫌臣貌醜、遂黜職不用、羞帰故里、触殿階而死」。

(44) 『唐鍾馗全伝』第一七則「超度秀英」、「至殿前謝恩、唐王嫌其貌醜、遂擯棄之而不用、馗進前弁曰、当今天下、臣聞以文羅士、未聞以貌棄人者也、与唐王弁論一番、触階而死、唐王後亦悔悟賜其緑袍、厚礼以葬之」。

(45) 『唐鍾馗全伝』第二則「(回目なし)」などには鍾馗は生まれつき「面貌奇異、体格非常」であったいう描写が見られる。現代においても広く知られる「鍾馗嫁妹」故事などの鍾馗が応試に赴く途中悪鬼に美貌を妬まれて顔を傷付けられるといった内容とは異なる。文彦生選編『中国鬼話』(上海文芸出版社、一九九七年)「鍾馗」項を参照。

(46) 古典通俗小説に見られるこの種の内容では『西遊記』における唐太宗の地獄巡りが有名である。また『唐鍾馗全伝』の地獄の描写に見られる影響に関しては桜井氏、注(40)前掲論文を参照。

(47) 『唐鍾馗全伝』第一一「帝賜筆剣」、「上帝賜你宝剣一把、神筆一枝、筆可以上達天庭、下通地府、人間如有善悪、可以此筆紀之、剣可以除天下之邪魅、可以収天下之虚耗、人間如有妖魔、可以此剣降之」。